

美しい足よ

【聖書】 イザヤ書 52章7～10節

いかに美しいことか 山々を行き巡り、良い知らせを伝える者の足は。彼は平和を告げ、恵みの良い知らせを伝え 救いを告げ 「あなたの神は王となられた」と シオンに向かって呼ばれる。その声に、あなたの見張りは声をあげ 皆共に、喜び歌う。彼らは目の当たりに見る 主がシオンに帰られるのを。

歓声をあげ、共に喜び歌え、エルサレムの廃墟よ。主はその民を慰め、エルサレムを贖われた。主は聖なる御腕の力を 国々の民の目にあらわにされた。地の果てまで、すべての人が わたしたちの神の救いを仰ぐ。

【序】 イザヤが生きた時代

預言者イザヤは、主イエスの誕生よりも 740 年ほど前に、南ユダ王国のウジヤ王が死んだ年、神さまから預言者として召されました。そしてヨタム、アハズ、ヒゼキヤと三代の王の時代に貴重な予言の数々を残し、マナセ王の時代に殉教の死を遂げたと言われています。

66 章全部がイザヤの予言ではなく、40 章以下は BC586 年にユダ王国がバビロンによって滅ぼされ、捕囚として 50 年を過ごした時期のものではないか(第二イザヤ)、55 章以下は更に後の時代の予言ではないか(第三イザヤ)という学説が、18 世紀中ごろから強くなってきました。しかし私は、聖書が依然としてイザヤ書 66 章をイザヤの予言としている以上は、**全てを**預言者イザヤの予言として読みとっていいこうと思っています。

イザヤが生きた時代は、北のアッシリアが強大になり、国際関係が大きく変化した時代でした。南に位置するシリアと北イスラエルは南ユダと三国同盟を結んでアッシリアの侵略に対抗しようとしていました。しかしアッシリアから一番遠い南に位置するユダはその誘いを拒否したので、**シリアとイスラエルの同盟軍**がユダに攻め込んでエルサレムを包囲しました。そこでユダはアッシリアに従属する条件で、同盟軍を北から攻撃するように願い出ました。

アッシリアは早速シリアに侵略してこれを征服し、更に北王国イスラエルも**滅ぼして**しまいました。紀元前 722 年のことです。ユダはアッシリアの強力な支配から逃れるためにエジプトに助けを求めました。そこで**アッシリアの大軍**がユダに攻め込み、エルサレムを包囲しました。ところがアッシリア軍 18 万 5 千人が一夜のうちに自滅してしまう奇跡が起こり、ユダは生き延びたのでした。**紀元前 700 年頃**のことです。こうしてしばらくの間、アッシリアの脅威は収まりました。しかしアッシリアは 紀元前 612 年に**バビロン**に滅ぼされ、そのバビロンによって**紀元前 586 年**にユダ王国も滅ぼされ、エルサレムは**廃墟**となり、王以下主だった人々は**バビロン捕囚**の 50 年を過ごすことになったのでした。捕囚から開放されて帰国を赦された人々がエルサレムの**神殿と城壁**を再建したのは**紀元前 444 年**です。国が滅び、イスラエルが廃墟にされてから 143 年も経ってのことでした。

[1] イザヤに示された予言

私たちは去年の9月から11月にかけて、丁度その歴史を列王記下、エズラ記、ネヘミヤ記で学びました。その時私は「国が滅びるとは」「心に刻まれた喜びの叫び」「生きる力の源」と題して3回、大きな歴史のうねりのなかで、**イスラエルの民がどのような信仰の歩みをしたかを説教させていただきました**。読み返していただけたらと思います。後のテーブルにも置いておきました。

なぜ**国が滅びる**のでしょうか。歴史に学んで世界情勢を的確に判断できなかった**国王の無能さ**が上げられます。しかし聖書は「**主の目に悪とされることを行ったから**」と繰り返し語っています。主の目によって国の存亡が決まる——人間の思惑や行動が歴史を織りなしていくように見えますが、**歴史は神の御心が働く場**であるというのが、聖書の信仰なのですね。それ故に私たちは神の御心を尋ねつつ、歴史に参与していかなければなりません。

今日のイザヤの予言には、「**歓声をあげ、共に喜び歌え、エルサレムの廃墟よ**。主はその民を慰め、エルサレムを贖われた」(9節)という言葉があります。エルサレムがまだ廃墟のままになっていて、何時再建されるか見通しの経たない時の言葉だとすると、**エズラやネヘミヤの帰国の頃**ということになりましょうか。エズラの帰国が紀元前458年、ネヘミヤの帰国は445年です。それはイザヤよりも**250年以上も後のこと**でした。だから第二イザヤの言葉だろうと言われます。

しかし前々回に私たちはイザヤ書2章「**終末の平和**」の予言を学びました。イザヤが幻に示されて語った予言は、**歴史の終局**に神さまがもたらしてくださる、全世界の**全く新しい平和**です。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばなくなる**世界の到来**です。

先週山下先生と学んだイザヤ書6章イザヤの召命も、彼が「**高く天にある御座**に座して居られる」聖なる万軍の主なる神さまを見上げて、御言葉を聞き取っていました。神さまの支配とご計画は**歴史の究極までを視野におさめつつ**、今をもお計りになっておられます。ですからイザヤの予言も歴史のはるか先の出来事を、今生きる者にも語るのです。

国が滅びるとは、その国の人々が頼りにしていた**神が滅びる**ことを意味しました。紀元前2000年も昔に世界の全ての人々の祝福の源として**アブラハム**を選び、その子孫イスラエルの民を通して、祝福を世界に及ぼそうとして、歴史を導いて来られた世界の主なる神さまが、バビロンによってイスラエルもろともに滅ぼされてしまったとすれば、イスラエルの民にとって、自分たちの存在そのものが**全否定**されたことを意味します。これは最も深刻な絶望でした。

しかしイザヤに示された予言は、**万軍の主は生きて居られて**、廃墟となったエルサレムに、王として戻って来られるというのです。電話やラジオ、テレビの無い時代です。主から使わされた**伝令**が山々を行き巡り、そのよい**知らせ**を伝えて回るしかありません。町には**見張りの塔**があり、走ってくる伝令を見張っていました。遂にある日、一人の**伝令**が山の上に現れて叫んだのです。「**あなたの神**

は王となられた。主がシオンに帰られるのを、目の当たりに見る」。

万軍の主なる神さまがエルサレムに帰って来てくださる。民の罪を赦し、救いと平和を再びもたらして下さるのです。民よ、歓声をあげ、共に喜び歌おう。主は**聖なる御腕の力を、国々の民の目にあらわされた。地の果てまで、すべての人が、わたしたちの神の救いを仰ぐのです。なんと嬉しいことでしょうか。**

それにしても、**山々**を**行き巡り**、このよい知らせを伝えながら遂にエルサレムにも到着したこの**伝令の足は**、汗とほこりにまみれ、石につまずいて傷つき、血に染まっていたことでしょう。しかし**恵みのよい知らせ**を伝えてくれた**足**です。なんと**貴い足**でしょうか。なんと**美しい足**でしょうか。

20章には、イザヤが神さまから**裸、はだしで3年間歩き回れ**と命じられています。イスラエルが助けとして依り頼むエジプトとクシュ(エチオピア)の人々が、アッシリアの捕虜になり、このように**恥**をさらして引き立てられていくことを、**行動**で予言させられたのでした。

イザヤはどんなに恥ずかしい3年間を過ごしたことでしょうか。**はだしで歩く痛みと惨めさ**を身にしみて感じる日々だったに違いありません。しかし52章の場面では、伝える言葉が平和と恵みの良い知らせなのです。ああこれを伝える足は、なんと**幸いな足**だろう、なんと**美しい足**だろうと、心の底から喜びつつ、イザヤはこの予言を語ったことでしょう。

[2] 弟子たちの足を洗われた主イエス

ヨハネ福音書が記す**主イエスのお姿**が浮かんできます。4章にサマリアの町はずれの井戸端で、真昼時に人目をしのいで水を汲みにきた女性に、主イエスは言葉をかけられました。主との会話を通してこの女性は、主が**待望の救い主**ではと思い始めました。彼女は水がめをそこに置いて町に行き、人々を連れて来ました。この時主は弟子たちにおっしゃいました(4:35~42)。「あなたがたは『刈り入れまでまだ**4ヶ月もある**』と言っている。目を上げて畑を見るがよい。色づいて**刈り入れ**を待っている」。主はサマリアのこの女性の中に、サマリアの人々の救いという**収穫の最初の一束**を見ておられたのでした。そして事実、それから二日間滞在して、多くのサマリア人を救いに導かれたのでした。主イエスは、**将来の出来事を今に引き寄せて**、見据えておられるお方でした。

その主イエスが十字架にかけられる前の晩に、弟子たちと**最後の食事**をおとりになった時のことです。食事の前に上着を脱ぎ、たらいに水を汲んで弟子たち一人ひとりの**足を洗い**、腰にまとった手拭いで拭きました(13:4~5)。主は何故、弟子たち皆の足を洗われたのでしょうか。勿論、身を低くして謙遜に仕え合うことの大切さを教えるためでした。しかしそれだけではありません。

最後の晩餐の後、主が逮捕されるや弟子たちは**皆逃げ散って**しまいました。弟子の筆頭ペトロなどは、イエスを知らないと三度も嘘をついて我が身を守ってしまいます。しかし主はその先を見ておられるのです。主の十字架の死によってもたらされる救いの**福音は**、この**弟子たちの足が**、全世界

のすべての人々に、告げ知らせることを。

山々を歩き巡り、良い知らせを伝える者の足、平和を告げ、救いを告げ、恵みの良い知らせを伝える足は、なんと美しいことか——ですから主イエスは弟子たちが逃げ散る前に、十字架の福音を告げる伝道者の足の美しさを、弟子たち一人一人の足にご自分の手で直接ふれて、伝えられたのではないのでしょうか。

十字架の死の後で墓に葬られた主は、三日目の朝に復活して弟子たちの前にご自身を現して、彼らにお命じになりました。「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そしてエルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土、また地の果てに至るまで、わたしの証人となる」(使徒言行録1:8)。そしてその約束通りに、50日たった五旬節の朝に、聖霊が弟子たち一人ひとりの上に豊かに注がれて、彼らは皆、世界の色々の言葉で福音を語る伝道者になったのでした。

キリスト教徒を迫害していた熱心なユダヤ教徒のパウロも、復活されたキリストと出会って回心し、聖霊に導かれて、福音を世界に伝える伝道者として生涯を献げました。彼もローマの信徒たちへの手紙にイザヤの言葉を引用しています。「聞いたことのない方を、どうして信じられよう。また、宣べ伝える人がなければ、どうして聞くことができよう。遣わされないで、どうして宣べ伝えることができよう。『良い知らせを伝える者の足はなんと美しいことか』と書いてあるとおりです」(ローマ 10:15)。

[結] イザヤの予言の成就

イザヤは、今日の予言に引き続いて、「主の僕の苦難と死」を語りました(52:13~53:12)。「見よ、わたしの僕は栄える。はるかに高く上げられ、あがめられる」と語りながら、そのお方は「輝かしい風格も、好ましい容姿もない。彼は軽蔑され、人々に見捨てられ、多くの痛みを負い、病を知っている」。「わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。彼が担ったのはわたしたちの病、彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに、わたしたちは思っていた 神の手にかかり、打たれたから彼は苦しんでいるのだと」。「彼が刺し貫かれたのはわたしたちの背きのためであり、彼が打ち砕かれたのは、わたしたちの咎のためであった」。「彼の受けた懲らしめによって、わたしたちに平和が与えられ、彼が受けた傷によって、わたしたちは癒された」。「わたしの僕は、多くの人が正しい者とされるために、彼らの罪を自ら負った」。「多くの人の過ちを担い、背いた者のために執り成しをしたのは、この人であった」。

イザヤが死んで 700 年後に、ベツレヘムの馬小屋で誕生したイエス・キリストは、この予言通りの生涯を送られ、十字架にかけられながら、「父よ、彼らをお赦しください」と祈りつつ、自分を十字架につけた人々の罪を、ご自分の身に引き受けて死んで下さいました。そして一切の暴力を否定し、愛し合い重荷を負い合って共に生きていく十字架による平和の道をお開きになりました。

今日の予言の終わり、52 章 10 節に「地の果てまで、すべての人が わたしたちの神の救いを仰ぐ」とあります。そうです。世界の究極の救いと平和は、この十字架の救い主イエス・キリストのもとに、

全ての人が集まり、その御言葉を聞き、示される**愛の道**を歩むことによってもたらされるのです。

今日は十字架から50日たった**聖霊降臨の記念日(ペンテコステ)**です。弟子たちが 聖霊を頂いて世界に良い知らせを告げる**美しい足**となって、働き始めた記念日です。私たちも、聖霊の豊かな降臨を、心を合わせて祈りましょう。

そしてこの救い、この平和の知らせを、わたしたちも家族に、友人に、日本のすべての人々に、世界のすべての人々に、知らせていきましょう。**聖霊として今も私たちと共にいてくださる主イエスは、わたしたちの足をも洗って、「いかに美しいことか、山々を歩き巡り、良い知らせを伝える者の足は」と呼びかけて下さっておられます。**

完